「都市空間の人文地理」を振り返って

都市環境学部　教授
杉浦　芳夫

都立大生向けの科目名「人文地理学Ⅰ」に対応するこの授業では、しばらく前までは、経済学部の受講生が多いこともあって、経済立地論の紹介を中心に、人文地理学の理論的研究分野のテーマを話していました（杉浦担当年次）。しかし、前回受けた全学の学生による授業評価結果は、授業内容が受講生に十分理解されていないのではないかという危惧を、私に抱かせました。もちろん、私の教授方法の問題もありますが、教養向け授業としては内容が専門的すぎるのではないかと思い、授業内容を変更することにしました。

理論的、抽象的な事柄よりも、具体的に地域で起こっている事柄をテーマとした方が良いと考え、戦後日本の変貌の様相を人文地理的現象と絡めて話すようにしました。授業の前半では、農山村や地方都市、同後半では東京を対象に取り上げました。都立大が存続したならば、しばらくはこの内容で授業を続けたはずですが、首都大学東京に移行するに伴って、都市教養プログラム関連の科目に位置づけられたため、「人文地理学Ⅰ」は「都市空間の人文地理」に名称変更しました（ちなみに、「人文地理学Ⅱ」は、「地域環境の人文地理」に名称変更）。その結果、授業内容も科目名によりふさわしものということで、「人文地理学Ⅰ」の後半部分を膨らませたものにした次第です。

「都市空間の人文地理」の開講時間が、１限に設定されたことも、それまでの「人文地理学Ⅰ」とは違う点でした。これまで大人数の学生を対象にした１限の授業（しかも月曜日！）は経験したことがなかったので、どうなることかと不安でした。しかし、100 名を上回る学生が受講してくれたので、それも杞憂に終わりました。ただ、受講生の専門分野が様変わりし、都市環境学部の学生が半数近くを占めるようになりました。毎回、授業の開始に先立って、受講生に挨拶の声をかけ、受講生（の一部）からも返事をもらい、それをもって授業開始の合図としました。そして、時には、最初に黒板に配付資料にない補足事項を板書し、授業の冒頭から学生の関心を教壇の方に向けることも、意識的に行ないました。

私の授業は、出所がさまざま図表を切り貼りした資料（Ａ３サイズ１～２枚）に基づいて口述する従来型のものです。これ以外に、その日の授業で話す内容を要約したレジュメ（Ａ４サイズ１枚）も配付します。教育効果を考え、10 年ほど前からレジュメを配付するようにしています。このレジュメの左端には資料中の図表の番号を記し、レジュメの記述がどの図表に対応しているのか分かるようにしてあります。

この授業のねらいが、図表を読んで事象を理解することにあるため、これらのレジュメ・資料により、授業の復習も容易になるはずです。１回の授業内容はいくつかのパートに分かれているので、パートごとに見出しをつけた方が親切であることは分かっていますが、そこまですることはやり過ぎと思い、それはしていません。

またこの授業では、シラバスに書いてあるように、東京（大都市圏）で起こっている、あるいは起こった人文地理的現象（都心の人口回帰、商店街の空洞化、郊外の高齢化、産業廃棄物の不法投下による環境破壊など）を、テーマとして取り上げています。多くのテーマは新聞記事などで目にするもので、それに多少地理学の学問的な味つけをして話をしています。テーマを東京関係のものに絞ったのは、受講生が授業をより身近なものとして感じてくれることを期待したからです。とくに後半の東京郊外に関する授業で、３回ほど大学

のある多摩ニュータウンとその周辺をめぐる話題を取り上げていることは、それを強く意識してのことです。

私は、１回の授業が「読み切り短編」的なものになることを念頭においていますので、時間のことが気になり、どうしても授業が一方向的になってしまいます。授業中に受講生に問いかけをしたこともありましたが、残念ながら一度も返答は戻ってきませんでした。見知った顔を前にする学部の授業の時のように、冗談を交えての問いかけをするほどの余裕がないせいかもしれません。双方向的な授業を目指したいとは思いますが、大人数の授業ということもあって、私の能力ではなかなか難しそうです。

受講生の皆さんが全員、この授業に関心を持っているとは全く考えていません。必要単位を取得するために受講してくれている人が半数以上ではないでしょうか。それでも、受講生の中に、出席して本当に良かったと思うような人が一人でも二人でもいてくれれば、それなりの準備をして授業に臨む者にとっては望外の喜びです。